

## 週日の説教

金 大烈 神父 2009年5月5日(火)

### 《子どものために心をこめて祈ってください》

子どもは、なかなか親の思ったとおりになってくれませんね。

自分がお腹を痛めて産んだ子どもでも自分とは違います。考え方も違うし、いろいろな違いがあります。ただ、自分の息子であること、自分の親であることをお互いに考えながら愛し合うことです。自分の考えたとおりの子どもになってほしいと思うのは、親のわがままな考えです。医者になってほしい、と思って、本当に医者になった子どももいます。その子どもが本当に医者としての可能性があり、それを楽しめるくらいの性格ならばそれを導いて助けるのはよいことでしょう。しかし、世の中には子どもの考えなど全く考えず、能力もないのにスターになるようにと思うような親もいます。これは無駄なことです。

親が子どもに対して絶対諦めてはいけないものが一つだけあります。それは、義務でもあり権利でもあるものです。これが親として上手にできれば、皆様は子ども達について何も心配しなくてよいと思います。それは 祈り です。「この子どもをあなたに委ねます。」という祈りが絶え間なく続かなくてはならないのです。祈らずに子ども達に「このようにしてほしい」と言うのは、矛盾です。

皆様は自分が信じている信仰についてなぜ子どもの時からきちんと教育をしないのでしょうか。理由を聞くと、「宗教的なことは、大人になって自分で判断できるようになってから選ぶように、自由を与えたほうがよい。」と答える人が結構います。しかし、子どもの信仰の心というのは、寝ていて目が覚めた時に親が跪いて祈っている姿を見て、きれいに育つものです。一度も親が祈っている姿を見たことのない子どもは、親からもらわなかったからそういう心が育たないのです。仕方のないことです。私たちには、そういう意識が足りないのではないかと思います。

私の家族の話少し紹介します。私が4歳の時、母と二人の兄たちと共に洗礼を受けました。7歳違いの妹と9歳違いの妹も幼児洗礼を受けました。そして最後に、私が小学校5年生の時に、父も洗礼を受けることになりました。その時まで、父の親戚にも母の親戚にもカトリック信者は一人もいませんでした。(今ではどちらの親戚も百パーセント信者になっていますが…)

そのような環境の中で、長男の兄が神学校に入りました。その結果、親戚はうるさく騒ぎ、両親は自分達の兄弟から強く責められました。それは「なぜ結婚もできない、子どももできない道を歩ませたのか。それを許したのか。」という理由からでした。

韓国は伝統的に儒教的な文化ですから、ごく当たり前のこととして、生まれて大人になったら、結婚をして子どもを産むのが天と先祖のみ旨であり、人間の一番基本的な務めだと考えられていました。そして、結婚しない者は人間として、大人として、認めない時代でした。

だから、兄が神学校に入ったとき、いろいろ反対されて両親はとても困ったわけです。しかし二人は、自分たちは正しい道を歩んでいるのだから子どもが選んだ道を支えなければならない、と決意しました。そして二人の話し合いで、兄が入学したその日から、父が亡くなるまで守ったことが一つあります。それは別々の部屋を使うことでした。その頃、両親は50代でした。息子は神学校に入って修道者の道を歩んでいるのに、親としてできることをやりましようと話し合い、別の部屋を使うことにしたのです。私は子どもの頃、両親が同じ部屋にいるのを一度も見たことはなかったし、それが自然だと思っていました。

私が叙階されて何日か経ってから、その話を兄から聞きました。そして、迷いがあってもいつも心に浮かぶのは祈っている両親の姿です。だから、誘惑があっても、絶望することがあっても立ち上がったと思います。

それが親に与えられている一番大きい使命だと思います。本当に心をこめて毎日祈ってください。子ども達に文句を言わずに、文句を言うエネルギーがあれば、祈ってください。なぜ自分の力でそれを解決しようとするのでしょうか。祈れば、特に母親の祈りが絶え間なく続けられれば、子ども達は少し離れても必ず帰ってきます。これが皆様にいつも言いたいことです。

日曜日のミサをご覧ください。若者はほとんど見られません。もしかしたら皆様も皆様の親からこのようなことをもらわなかったから、皆様の子ども達にもあげることができなかったのかもしれない。しかし、今はみんな知っています。何が望ましいか、生きる意味は何であるか、何に向いて行かなくてはならないかを。そうしたら、その宝物を伝えてください。その伝える一番よい方法は祈る姿です。祈る姿を裏切るとは絶対にできません。そういうことを意識しながら祈ってください。私たちは、親であっても足りないものをたくさん持っています。しかし、子どもは、一番大切な存在ですよ。その子ども達のために涙を流して祈ってください。手放してはいけないことは、いつでも祈ることです。自分の夫、自分の妻のためには祈れなくても、子ども達のためには祈ってください。それがもともと作られた人間の姿です。それを私たちが軽く見てしまうと、ある意味で可哀想な子ども達になってしまいます。よろしくお願いします。

今日の福音(ヨハネ 10・22 - 30)に入ってみます。ファリサイ派のユダヤ人たちは、イエス様を信じませんでした。だから、イエス様は「私が見せた業を見たら、私がどういう存在か分かるはずなのに、もかかわらず信じてくれなかったので、私がどういう存在なのかあなた達は分からない。」と答えます。

皆様は、イエス様について、何を信じますか。奇跡を信じますか。慈しみを信じますか。それらを全部忘れてもいいのです。私たちが信じることは唯一つです。イエス様が私を愛していらっしゃるということです。それだけ覚えていてください。今もさまよっている私を変わずにいつも愛してくださっている。それだけ覚えることができれば、私たちの信仰は心配しなくても順調に行けるとおもいます。皆様は愛されています。それを実感してください。それが信仰です。

ありがとうございました。